第4回 忘れられない看護エピソード
優秀賞
看護職部門

1分間の面会

【三浦（みうら） ひとみ・大阪府】

ピッピッピッ…。詰所の隣の病室で、時々途切れながら心電図モニターの音が響いている。

30年前、新人看護師（当時は看護婦）だった私は、血液内科病棟に勤務していた。不規則なモニターの主は19歳の少年だった。少年は急性骨髄性白血病で入院しており、もう目を開けることも言葉を発することもなかった。

その日、40歳ぐらいの女性が詰所に飛び込んで来た。「息子に会わせてください」と何度も叫んだ。少年の母親だった。

少年は意識がある頃「僕を捨てた母親にはもう会いたくない。もし、僕を探して面会に来ても断ってください」と言っていた。幼い頃生き別れたその母親が、今、すぐ近くに現れたのだ。

私たちは迷った。病室に確認に行っても、意識のない少年から返事はなかった。息子が生きている間に一目会いたいと願う母親…。母親には一生会いたくないと言っていた少年…。私たちは、そのどちらの気持ちも踏みにじることはできなかった。

私たちは、少年の言葉をそのまま母親に伝えた。そして、白い予防衣とマスクを母親に着けてもらい、「看護婦のふりをして、1分間だけ脈を測って来てください。決して声は出さないでください」と言って、少年の病室に案内した。母親は約束を守ってくれた。震える手とこらえきれずにこぼれた涙が、そっと少年の手首に触れた。1分間の沈黙が続く。その時、少年の指がかすかに動いたように見えた。

それから数日して、少年は天国へ旅立っていった。

30年がたった今でも、時々あの日のことを思い出して、あれで良かったのだろうか…と考えさせられる。